

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24300293

研究課題名(和文)精神医学の科学哲学 - 精神疾患概念の再検討 -

研究課題名(英文)Philosophy of Psychiatry: A re-examination of the concept of mental illness

研究代表者

石原 孝二 (ISHIHARA, Kohji)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：30291991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は4つの研究領域、生物学的精神医学および認知行動療法の展開による疾患観の変化、精神疾患症状の現象論的・行為論的・認知哲学的把握、診断の歴史と科学論、当事者、家族、支援者の視点：地域社会論と障害学からの検討を設定し、各領域の研究を通じて精神疾患概念の再検討と「精神医学の科学哲学」の展開をはかった。研究の成果は15本の論文と59回の学会等の発表・講演、国際会議Tokyo Conference on Philosophy of Psychiatryの実施などを通じて発表されている。また、本研究の集大成として、全3巻のシリーズ書籍「精神医学の哲学」(仮題)を刊行する予定である。

研究成果の概要(英文)：This project re-examined the concept of mental illness against the backdrop of the current changes in psychiatry in 4 research fields: (A) studying the changes in views regarding mental illness due to developments in biological psychiatry and cognitive therapy; (B) understanding the symptoms of mental illness from the perspectives of phenomenology, the theory of action, and cognitive philosophy; (C) conducting historical and theoretical investigation of diagnosis; and (D) understanding mental illness from the perspectives of the patients, their families, and any other support groups using community studies and disability studies. The results of the study were published in 15 papers and 59 oral presentations. Moreover, a 3-volume book series (in Japanese) called "Philosophy of Psychiatry" is in preparation (to be published in 2016).

研究分野：科学技術哲学、現象学

キーワード：精神医学 科学哲学 精神疾患 精神障害 当事者研究 現象学

1. 研究開始当初の背景

現在の精神医学では、精神疾患(精神障害)を生物・心理・社会モデルにおいてとらえることが一般化している。しかし、生物的要因、心理的要因、社会的要因のそれぞれがどのように関連しあっているのかが明確にされているとは言い難い。他方でまた、近年の生物学的精神医学の進展、アメリカ精神医学会の診断・統計マニュアル DSM の改訂作業、地域生活支援や当事者研究の展開など、精神医学をめぐる状況が国内外で大きく変化していた。特に研究開始当初は、DSM の改定作業が大詰めを迎えており(2013年に発表された)診断基準の変更が大きな関心を集めていた。そうした状況の中、精神疾患とは何か、どのように分類されるべきかという問題に関して、科学哲学的な分析が必要であるように思われた。

2. 研究の目的

上記のような背景のもと、本研究プロジェクトは精神医学の哲学に関する学際的な研究プロジェクトを組織し、日本における精神医学の哲学を展開し、精神疾患概念を再検討することを目的とした。本研究では、この目的を達成するため、4つの研究領域(生物学的精神医学および認知行動療法の展開による疾患観の変化、精神疾患症状の現象論的・行為論的・認知哲学的把握、診断の歴史と科学論、当事者、家族、支援者の視点：地域社会論と障害学からの検討)を設定し、研究を進めていくこととした。

精神医学と哲学の関係については、日本でも比較的早くから研究が進められてきたが、その多くは現象学や精神分析を背景に展開されてきたものである。本研究はそうした成果をも参照しながら、近年の分析哲学系の哲学者たちによる精神医学の哲学の展開や、精神医学をめぐる研究動向、社会的・歴史的背景の変化を踏まえて、精神医学の「科学哲学」を展開し、精神疾患概念の再検討を進めることとした。また本研究では、海外の研究者の協力のもと、国際的な議論の動向を十分踏まえるとともに、科学史・医療人類学、精神医学、社会福祉学、障害学・当事者研究など多様な分野の国内の研究者による研究組織をつくり、精神医学の科学哲学に対して、日本から独自の貢献を果たすことを目指した。

3. 研究の方法

本研究には様々な専門分野をバックグラウンドとする研究者が参加したが、本研究は精神医学の科学哲学の展開をめざすものであり、各研究参加者の個人的な理論的・文献的研究と研究集会を組み合わせる形で研究プロジェクトを進めていった。研究参加者はそれぞれ上記の4つの研究領域の1つまたは

複数の領域を担当し、それぞれの研究手法に基づいて研究を行った。研究期間中は4回の全体研究会と1回の国際会議を開催した。また、各研究参加者の個人発表や講演のほかに、学会でのシンポジウムやワークショップを企画した。全体研究会や国際会議、学会でのシンポジウム等では、研究参加者が発表を行ったほか、外部の研究協力者にも発表・講演を依頼し、精神医学の科学哲学に関する様々な論点を幅広い視野から検討することを試みた。

4. 研究成果

本研究の成果は15本の論文、59件の学会発表、7件の書籍によって発表されている。また、東京で国際会議を開催したほか、日本科学哲学会でのシンポジウムと科学基礎論学会でのワークショップを企画した。

【国際会議】

国際会議は、2013年9月20日から23日にかけて、Tokyo Conference on Philosophy of Psychiatryとして開催した。本会議は本研究プロジェクトを主催組織とし、東京大学大学院総合文化研究科付属・共生のための国際哲学研究センター・上廣共生哲学研究部門および東京大学大学院総合文化研究科・進化認知科学研究センターを共催組織として開催された(進化認知科学研究センターはサテライトワークショップのみ共催)。本会議は4日間にわたって開催され、本研究プロジェクトの研究代表者と分担者、連携研究者、海外共同研究者(Shaun Gallagher, Josef Parnas, Kevin Chien-Chang Wu)が発表したほか、外部からも講演者の招聘や発表者の募集を行った。本会議では、社会認知、精神医学の歴史、現象学、行為者性感覚など精神医学の哲学に関する広範なテーマについて、27人が発表・講演を行った。

【国内学会】

2013年11月の日本科学哲学会大会でのシンポジウム「精神医学の哲学：精神疾患概念の再検討に向けて」では、石原、信原、糸川、鈴木がそれぞれ、精神医学の医学化、妄想のメカニズム、統合失調症概念の異種性と複雑性、日本精神医学の近代化モデルに関する提題を行った。本シンポジウムを受けて、学会誌『科学哲学』47巻第2号の特集テーマが「精神医学の哲学」となり、シンポジウムの提題者の論文が掲載された。また2013年6月に開催された科学基礎論学会総会においてワークショップ「DSM-5：アメリカ精神医学会の新診断基準をめぐる」を開催し、2015年6月、2013年5月に出版されたDSM-5の背景と意義について議論を行った。

【各研究領域の成果】

4つの研究領域における研究を通して「精

神医学の科学哲学」を展開し、精神疾患概念の再検討を行うという本研究の目的は、上記のような国際会議、学会でのシンポジウム・ワークショップの開催、講演会・研究会を通じて研究が進められたほか、論文・書籍・学会発表等においてその成果が発表されてきた。各領域における各研究参加者の主な成果は以下の通りである。

生物学的精神医学および認知行動療法の展開による疾患観の変化：糸川は、精神疾患に関する分子生物学的研究の歴史および最近の研究動向を踏まえた上で、統合失調症を中心に精神疾患概念の検討を行った。石垣は、認知行動療法の基礎と展開について整理を行った。また石原は、生物学的精神医学や薬物療法の歴史的な展開と精神疾患（精神障害）概念との関係について検討を行った。さらに、2009年から米国 NIMH が開始した RDoC (Research Domain Criteria) プロジェクトが精神疾患概念に対して与える影響について考察を加えた。

精神疾患症状の現象論的・行為論的・認知哲学的把握：信原は妄想及び思考吹入について、哲学的な考察を行った。妄想については、経験の異常だけではなく、信念評価の異常も必要だとする二要因説を擁護しつつ、それをさらに洗練して、その両方の説明には、経験の深刻な異常と信念評価の軽い異常が必要であることを明らかにした。思考吹入については、「思考の所有者性」とはいったい何かを詳細に考察し、「主観性」、「行為者性」、「制作性」、「因果的一貫性」の四つの候補を吟味して、因果的一貫性とするのがもっとも適切であることを明らかにした。河野は、「生態学的現象学」という立場から、脳性まひと自閉症スペクトラムと呼ばれる子供たちの教育現場を事例として、身体を持つ表現力、コミュニケーション力などを考察した。また石原は、現象学的精神病理学における「共通感覚」論と「身体化された心」アプローチとの関係の検討を行うとともに、認知神経リハビリテーションの哲学的検討を通して、認知と運動イメージと言語表現、身体運動の関係などに関する考察を行った。

診断の歴史と科学論：石原はアメリカ精神医学会の診断・統計マニュアルにおける診断基準の変遷やその背景などを検討しながら、診断基準に関する科学哲学的な考察を行った。北中は、「ライフサイクルの医療化」という視点から、近年急速に精神医学的枠組みを用いた概念化が進んでいる「日常的苦悩」の領域 発達障害、うつ病と認知症 - について人類学的調査を行った。予防医学や先制医療の方法論が精神医学にも導入される中で、より早く疾患を見つけ、精神科的介入を進めることがどのような臨床的・倫理的葛藤や問題を引き起こしているのかについて、国際比較を踏まえて分析を行った。鈴木は、特に日本の事例に焦点を当て、精神病院の症例記録の分析を通して、診断の歴史的

変遷に関する検討を行った。

当事者、家族、支援者の視点 - 地域社会論と障害学からの検討：熊谷は当事者研究の有効性という観点から、痛みや依存症の理解および対処法に関して、当事者研究がどのような意義を持ちうるのかを明らかにした。向谷地は、当事者研究の近年の展開を踏まえながら、当事者研究と精神医学との関係について検討を行った。石原は当事者研究と現象学的精神病理学の関係について検討を行うとともに、イギリス障害学や米国における consumer/survivor movement と当事者研究の比較を行い、当事者研究の意義と特徴を明らかにした。また近年注目を集めているフィンランドのオープンダイアローグアプローチの調査を行い、オープンダイアローグアプローチと地域社会との関係などに関する分析を行った。

なお、精神疾患の概念の再検討という課題に関して、石原は、WHO の国際疾病分類 (ICD) やアメリカ精神医学会の診断・統計マニュアル (DSM) においては、mental illness (精神疾患) という語の使用が避けられていることから、mental disorder (精神障害 [精神疾患とも訳される]) 概念の分析を中心に行った。DSM、ICD における mental disorder 概念の変遷やウェイクフィールドの「有害な機能不全」モデルの検討などを踏まえて、mental disorder (精神障害) と disease (疾病) 概念の関係を整理し、精神医学の対象としての精神障害の概念の哲学的な検討を行った。

【シリーズ書籍の刊行】

本研究プロジェクトの集大成として、シリーズ書籍「精神医学の哲学」(仮題) 全 3 巻 (東京大学出版会) を刊行する予定である。シリーズの執筆者は研究代表者・研究分担者及び外部の研究協力者である。現在第 1 巻、第 2 巻が印刷中であり、第 3 巻も編集作業中である。

本シリーズの第 1 巻『精神医学の科学と哲学』(仮題) は精神医学・精神障害に関する科学論と哲学をテーマとしている。第 1 章では、精神疾患 (精神障害) の概念分析および精神障害の分類問題、精神医学および精神障害の哲学などを扱うほか、思考吹入と妄想の哲学的分析、精神分析の思想、現象学的精神病理学、統合失調症、精神薬理学、生物・心理・社会モデル、認知行動療法をテーマとした各章が配置されている。

第 2 巻『精神医学の人類学と歴史』(仮題) は、精神医学の歴史と人類学に関する総論のほか、PTSD、精神疾患の「声」の歴史、宗教、精神医学の専門職、病の経験、日本社会における家族、精神療法と生物学的精神医学の人類学、メディアをテーマにした章が配置されている。

第 3 巻『精神医学と現代社会』(仮題) は、精神医学と隣接領域、リカバリー思想、地域

精神医療、精神科医療における家族の役割、当事者研究の展開などを扱う予定である。

本シリーズは精神医学の科学論と哲学、歴史学と人類学、そして地域精神医療と精神医学と精神科医療における家族、当事者の問題を体系的・包括的に扱うものであり、日本における精神医学の哲学の展開に大きく寄与しうるものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

Junko Kitanaka, Rebirth of Secrets and the New Care of the Self in Depressed Japan, *Current Anthropology*, 56: S251 - S262, 査読あり、2015年

<http://www.journals.uchicago.edu/doi/pdfplus/10.1086/683273>

熊谷晋一郎, 自己感の破たん：痛み、トラウマ、アディクション、トラウマティック・ストレス、13:34-43, 査読あり、2015年

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40020511679>

石原孝二, 精神病理学と薬物療法、*Power Mook 精神医学の基盤* 1:64-71, 査読無し、2015年

石原孝二, 精神医学における記述的方法と「機能不全」モデル：精神障害概念と「自然種」、*科学哲学*, 47(2): 17-32, 査読無し、2014年

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpssj/47/2/47_17/_pdf

石原孝二, 「精神障害」概念の行方とDSM-5、*精神科診断学*, 7(1): 16-21, 査読なし、2014年

信原幸弘, 妄想と信念評価の異常、*科学哲学*, 47(2): 1-16, 査読なし、2014年

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpssj/47/2/47_1/_pdf

糸川昌成, 脳と心、分子生物学は精神疾患を解明するのか、*科学哲学*, 47(2): 53-68, 査読無し、2014年

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpssj/47/2/47_53/_pdf

熊谷晋一郎, 発達障害当事者研究：当事者のサポーターの視点から、*臨床心理学*, 14: 806-812, 査読なし、2014年

石原孝二, 精神病理学から当事者研究へ：現象学的実践としての当事者研究と<現象学的共同体>、石原孝二・稲原美苗編, *共生のための障害の哲学*, *UTCP Uehiro Booklet*, No.2: 115-137, 査読なし、2013年

<http://hdl.handle.net/2261/55485>

Yukihiro Nobuhara, The Tenacity of Delusion and Existential Feelings,

Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine, 7: 3-17, 査読なし、2013年

<http://itetsu.jp/main/wp-content/uploads/2015/07/7-2nobuhara.pdf>

北中淳子, 社会運動としての医療化 - 医療人類学からみた日本の社会精神医学、*日本社会精神医学雑誌*, 22(3): 294-300, 2013年

熊谷晋一郎, 痛み、自己そして意味、*現象学年報*, 8: 13-22, 査読なし、2013年

[学会発表](計59件)

石原孝二, 認知・行動・運動と脳機能：認知神経リハビリテーションの哲学的基礎、*認知神経リハビリテーション学会学術集会*、神戸新聞松形ホール(兵庫県神戸市)、2015年10月3日

Kohji Ishihara, Common Sense, Affect, and Mental Disorders: Embodied Mind Approach and Philosophy of Psychiatry, The 6th International Conference on Comparative Studies of Mind, Chung-Ang University, ソウル(韓国)、2015年8月21日

石原孝二, 精神医学は何を対象としているのか？ 精神医学の哲学と精神障害概念、*哲学若手研究者フォーラム*、国立オリンピック記念青少年センター(東京都渋谷区)、2015年7月11日

Junko Kitanaka, Early Intervention: A new global sense of therapeutic time, Association for Asian Studies Annual Conference, 2015年、シカゴシェラトンホテル、シカゴ(アメリカ合衆国)、2015年3月27日

Akihito Suzuki, The Psychiatric Case Record from the Patient's Point of View in Japan in the Early Twentieth Century, Association for Asian Studies Annual Conference, シカゴシェラトンホテル、シカゴ(米国)、2015年3月27日

糸川昌成, 脳と心-脳の部品を25年間研究してみて、第10回統合失調症学会(会長講演)、都市センターホテル東京(東京都千代田区)、2015年3月29日

石原孝二, 精神障害(疾患)概念と「介入主義」、*科学基礎論学会秋の例会*、東京大学(東京都目黒区)、2014年11月1日

鈴木晃仁, 精神病床の限定と患者の受療行動：昭和戦前期の東京の精神病院のデータより、*日本精神神経学会第110回大会*、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)、2014年6月27日

北中淳子, 先制医療時代のうつ病：人類

学的視点から、日本精神神経学会第 110 回大会、2014 年、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市) 2014 年 6 月 27 日
石原孝二、ヤスパース「現象学」と「精神病理学」の構造、意義、限界、ヤスパース協会第 30 回大会、高千穂大学(東京都杉並区) 2013 年 12 月 7 日
石原孝二、精神疾患・精神障害概念の再検討 精神医学の「医学化」の 200 年、日本科学哲学会 46 回大会シンポジウム、法政大学(東京都千代田区) 2013 年 11 月 23 日
鈴木晃仁、日本精神医学の近代化モデルの再考、日本科学哲学会 46 回大会、法政大学(東京都千代田区) 2013 年 11 月 23 日
糸川昌成、遺伝子研究から見えてきた精神疾患概念の課題と再編：異種性と複雑性、日本科学哲学会 46 回シンポジウム、法政大学(東京都千代田区) 2013 年 11 月 23 日
信原幸弘、妄想と認知バイアス、日本科学哲学会 46 回シンポジウム、法政大学(東京都千代田区) 2013 年 11 月 23 日
石原孝二、DSM-5 と「精神障害」概念の行方、日本精神科診断学会、ピアザ淡海(滋賀県大津市) 2013 年 7 日
Junko Kitanaka, The Earlier, the Better: A New Sense of Time for Child Development in Japanese Psychiatry, American Anthropological Association Annual Meeting, Hilton Hotel, Chicago シカゴ(米国) 2013 年 11 月 21 日
Tetsuya Kono, Ethics in the Classroom: The re-examination of the concept of autonomy, 3rd International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities, Asia-Pacific Regional Conference, 早稲田大学(東京都新宿区) 2013 年 8 月 23 日
北中淳子、うつと文化：医療人類学的観点から、多文化間精神医学会、栃木県総合文化センター(栃木県宇都宮市) 2013 年 6 月 15 日
Junko Kitanaka, Isolating the Vulnerable: National Debates about Workers' Depression in Recession-Plagued Japan, American Anthropological Association, Annual Meeting, San Francisco(米国) 2012 年 11 月 16 日
Kohji Ishihara, Phenomenology and Psychiatry: Toward a Phenomenological Community, The 5th Biennial Meeting of the PEACE (Phenomenology for East-Asian Circle Conference), Phenomenology and Naturalism, Peking University(中国)、2012 年 9 月 22 日
21 北中淳子、うつ病のグローバルな台頭：

今、文化を問うことの意味、九州大学(福岡県福岡市) 2012 年 6 月 24 日

- 22 Tetsuya Kono, Phenomenology of Pain, The Tenth Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology, オスロ(ノルウェー) 2012 年 6 月 9 日

〔図書〕(計 7 件)

T. Shakespeare, D. Bezmes, S. Yardimci, K. Ishihara ほか計 20 名, *Disability Research Today: International Perspectives*, Routledge, 2015, pp. 254 (27-42).

河野哲也、現象学的身体論と特別支援教育：インクルーシブ社会の哲学的研究、北大路書房、2014 年、238 ページ

水野雅文、朝倉聡、張賢徳、北中淳子 ほか計 33 名、重症化させないための精神疾患の見方と対応、医学書院、2014 年、304 ページ(265-270)

中山剛史、信原幸弘、河野哲也、石原孝二 ほか計 14 名、中山剛史、信原幸弘 編『精神医学と哲学の出会い』玉川大学出版部、2013 年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/philosophypsychiatry/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石原 孝二 (ISHIHARA, Kohji)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
 研究者番号：30291991

(2) 研究分担者

信原 幸弘 (NOBUHARA, Yukihiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
 研究者番号：10180770

河野 哲也 (KONO, Tetsuya)

立教大学・文学部・教授
 研究者番号：60384715

鈴木 晃仁 (SUZUKI, Akihito)

慶應義塾大学・経済学部・教授
 研究者番号：80296730

北中 淳子 (KITANAKA, Junko)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号: 20383945

熊谷 晋一郎 (KUMAGAYA, Shinichiro)
東京大学・先端科学技術研究センター・准教授

研究者番号: 00574659

糸川 昌成 (ITOKAWA, Masanari)
東京都総合医学研究所・精神行動医学研究分野・病院等連携研究センター長

研究者番号: 40332324

(3)連携研究者

石垣 琢磨 (ISHIGAKI, Takuma)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号: 70323920

笠井 清登 (KASAI, Kiyoto)
東京大学・医学部附属病院・教授
研究者番号: 80322056

向谷地 生良 (MUKAIYACHI, Ikuyoshi)
北海道医療大学・看護福祉学部・教授
研究者番号: 00364266